東方拳夢録

シオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方拳夢録

【Ｎコード】
Ｎ１４４０Ｗ

【作者名】
シオン

【あらすじ】
博麗　霊夢の先代の巫女の博麗　霊姫はある日、捨て子を拾った。捨て子の子はどんどん成長していって次代の巫女、博麗　霊夢と同棲生活に！？
※この物語は激しいキャラ崩壊、自己設定、オリ主、恋愛の成分を含みます。苦手な方はブラウザボタンを連打してください。

第壱話（前書き）

あらすじに書かれている通り、キャラ崩壊、自己設定、オリ主、恋愛が苦手な方はブラウザバックを推奨。
大丈夫だ。どんと来い！　という方は駄文ですが本編をお楽しみください…
※９／１６　修正しました。

第壱話

「雨…止まないわねぇ」
「そうね」

神社の縁側で2人の女性が灰色に染まった空を見上げてお茶を飲んでいた。
1人はリボンが多く着いたドレス着込んだ金髪の麗人。
幻想郷を作った最強の妖怪であり賢者の「八雲　紫」
もう1人は脇が出た特殊な巫女服を着た黒髪の麗人。
歴代最強の破壊力を持つ博麗の巫女の「博麗　霊姫」

「…ちょっと人里まで行って来るわ」
「…行ってらっしゃい」

紫は特に何も言わず縁側で霊姫を見送った。
霊姫はお金と傘を持つと人里へと歩いて行った。

博麗　霊姫は人気者である。
霊姫は歴代の巫女以上に優秀で職務にも熱心な女性だ。
人里の住人との交流も多く、霊姫を知らない住人はいない。
しかし、人里の住人は霊姫の名前は知らない。
皆がそろって「博麗の巫女」と呼んでいる。
霊姫の名前を知っているのは幻想郷でおそらく八雲　紫と彼女だけだろう……

人里に着いた霊姫は八百屋に向かい食料を買うと里の中心部のある店に向かった。
霊姫はその店に着くと店の奥に向かって声を上げた。

「沙耶花～いる？」
「待って～、今行きま～す」

店の奥から女性の声が聞こえ、ドタドタと音を立てて声の主の女性がやって来た。

「あぁ！　霊姫じゃない！　久しぶり～」

店の奥から来たのは天真爛漫の笑顔を携えた金髪の女性。
霧雨道具店の店主の女房「霧雨　沙耶花」
霊姫の数少ない自分の名前を知っている親友である。

「最近全然来ないから心配してたのよ！」

頬を膨らませて沙耶花は言った。
沙耶花は見た目はとても可愛らしい女の子で頬を膨らませて怒っている姿を見ても可愛く見えてしまって怒られている実感があまり出ず苦笑いしてしまう。
反省の兆しが見えない所為かさらに頬を膨らませる沙耶花。
しかし霊姫の目にはちょっと背伸びしてる感じの子供が怒っている様にしか見えずやはり苦笑いしてしまう。
いまだに反省の兆しが見えないので諦めたのか、ただ頬が痛くなって止めたのか分からないが沙耶花は頬を膨らませるのを止めた。

「もう…で、どうしたの？　お買い物？」

「いや、それより娘の様子はどうなんだろうかなって」
「あぁ、魔理沙ちゃんの事！　それはもう可愛くて可愛くて。最近になって私の事を「ママ」って言ってくれるようになってね。それがお父さんより早く言われたからお父さんが拗ねて大変だったわ～。後それからね…」
「う、分かった分かった。…で今その魔理沙ちゃんは？」
「ぐっすり眠っているわ。寝顔も可愛いわよ～。見る？　見るよね？」
「えと…今日は遠慮しとくわ」
「そう…残念だわ。…可愛いのに」

ぼそっと沙耶花は呟いた。
霊姫からしたら来るたびに見せられたりしてるのでこの対応にはいつも困っていた。

「しかし…沙耶花がこんな親バカになるとはね」
「そう？　…確かにそうかもね。でも霊姫も結婚すれば分かるわよ」
「そうかしら？」
「そうよ！　霊姫も結婚したら～。霊姫だって可愛いんだから～」
「結婚ね～。でも今は巫女の仕事で忙しいから…」
「もう…そんな事言ってると婚期逃すわよ！」
「余計なお世話よ」

それから霊姫と沙耶花は他愛のない話をして霊姫は神社へ帰った。
しかしその道中……

「ん…赤ちゃん？」

人里を出てすぐの所に籠に入った赤ちゃんがいた。
ご丁寧に赤ちゃんには濡れない様にと傘が差されてある。

霊姫は気になったのか赤ちゃんを覗いて見た。
人里に近いが妖怪からは狙われそうな場所にいるのに赤ちゃんは暢気に眠っていた。
置手紙の様なものは無く、この赤ちゃんの身元は分からない。
ただ、捨て子である事は霊姫にも分かった。
沙耶花にはあのように言っていたが霊姫も少なからず母親というものに興味があり、巫女としての職務を果たしたら結婚を考えていた。
そんなときに現れた1人の捨て子。
霊姫は少し考えた。
今の私が子供を1人育てられるかを。
霊姫はまた赤ちゃんを見る。
そしてその赤ちゃんに向かって一言。

「ねぇ、私の子になる？」

赤ちゃんは何も答えない。
ただ寝息をかくだけである。

「ふふ、喋るわけないよね」

霊姫は自分に呆れるように笑うと籠を持って人里へ行こうとした。
人里には里の守護者である「上白沢　慧音」という女性がいる。
とりあえず彼女に渡せばこの赤ちゃんは安全で元気過ごせれるはず。
そう思い霊姫が籠を持とうとしたその時、

「え？」

赤ちゃんは霊姫の手を握っていた。
起きているのかと思い赤ちゃんを見るが赤ちゃんはまだ眠っている。

「……」

霊姫は握られた手を離すと籠を持ってこの場から離れた。
しかし霊姫は人里ではなく神社の方へと向かった。

神社の縁側で待っていた紫だが、霊姫の帰りが遅いので神社の前でそわそわしながら待っていた。
霊姫は人里に行ってもすぐに帰ってくるので心配などしてなかったが今回はやけに帰るのが遅い。
なので紫はとても心配していた。
博麗の巫女と言っても実際は２０歳にも満たない女の子。
変な男に連れて行かれたのではないか。
妖怪に襲われたのではないか。
霊姫に限ってそんな事は無いと思う紫だがそれでも紫は心配であった。
神社の前で待っていると見覚えのある黒髪が見えた。
博麗神社は人里から離れており、道中には妖怪もおり普通の住人はまず神社には来れない。
なのですぐに霊姫だと認識できた。
そしてその紫の考えは当たっていた。
確かに神社に来たのは霊姫だった。
しかし行きの時と違って体中が血まみれだった。
紫はそんな霊姫を見てとても驚いた。

「れ、霊姫！　大丈夫なの！？　血まみれじゃない！」

紫は子供を心配する母親のように霊姫の元に駆け寄った。
しかし血まみれの割には霊姫は息一つも切らしていない。

「大丈夫よ紫。襲ってきた妖怪の返り血だから」
霊姫は紫にそう言うと「お風呂沸いてる？」と紫に聞く。
紫はホッとしてゆっくり頷いた。
そしてその時に紫は気がついた。
霊姫の手に買い物籠以外に少しばかし大きい籠の事に。
紫は霊姫に近づきその籠を覗いた。
そこには赤ちゃんがすやすや眠っていた。
紫は赤ちゃんと霊姫を交互に見て言った。

「霊姫…人攫いは犯罪よ」
「違うわよ！　捨て子よ！」

霊姫は紫にそう言い、さっきの経緯を紫に話した。

「ふ～ん。でその子どうするの？」
「……るの」
「え？」
「私が育てるの！」
「えぇ～！？」

紫が驚いて声を上げる。
その声にびっくりしてか赤ちゃんまで泣き出す。

「うぅ、うぇぇぇぇぇん！」
「あぁ、もう泣いたじゃない！　よ～しよし、泣き止んでね～」
「え、ちょ、霊姫！　ホントなの！　その子育てるって？」
「さっきそう言ったじゃない！」
「うぇぇぇぇぇん！」

「あ～よしよし。ちょっと紫！　アンタも手伝って！」
「えぇ！　手伝えって何を…」
「とりあえず何でもいいから出して！」
「びぇぇぇえええん！」
「ほら早く！」
「もうそんな急かさないでよ～」

あれから時間が経ち赤ちゃんはようやく寝て、そして霊姫もお風呂に入って今は縁側で月を見ながらお茶を飲んでいる。

「霊姫…風邪引くわよ」
「大丈夫よ。あと少ししたら寝るから」

紫は霊姫の隣に座り同じく月を見る。
雨は夜になると止んで、今は大きな月がよく見える。

「ねぇ…本気なの？」

紫が霊姫に言う。
霊姫は当然のように答えた。

「もちろんよ。あの子は私が責任を持って育てるわ」
「そう。ならもう何も言わないわ。頑張ってね霊姫」
「ふふ、私を誰だと思ってるの？」

霊姫は縁側から立つと拳を挙げて宣言した。

「私は博麗の巫女よ！　これくらい朝飯前よ！」

紫はそんな霊姫を見て微笑ましく思った。
まだ子供だと思っていた霊姫が少し大人に見えて紫は残念な気持ちと喜びの気持ちで胸がいっぱいになった。

「うぅ、うぇぇぇぇぇん！」
「ちょ、霊姫！　赤ちゃんが泣いてるわよ！」
「えぇ！　さっきまでぐっすり寝てたのに！？」
「うぇぇぇぇぇぇん！」
「あ～よしよし。泣かないでね～」
「びぇぇぇぇぇぇん！」
「あぁ、どうして泣き止まないの？　紫！　ちょっと手伝って！」
「…ふふ、やっぱりまだ子供ね」
「紫！　笑ってないで手伝って！」
「分かったわよ。今行くわ」

紫はまだまだ私が必要ね、と思い霊姫の元へ行った。

霊姫が赤ちゃんを拾って１０年が過ぎた。
今では立派な少年になって日夜、職務と修行の毎日である。

「母さん。おはようございます」
「おはよう霊耶。もう少しで朝ごはんが出来るからその間境内の掃除をしててちょうだい」
「はい。母さん」

あの赤ちゃんだった子の名前は「博麗　霊耶」
黒髪を伸ばして後ろで結っていて霊姫のお下がりの巫女服を着せられていた。
霊耶は霊姫に似てか霊力は少なかったがその分、格闘センスは煌めくものがあった。
霊姫はそんな霊耶を時に優しく、時に厳しく育て今では霊耶も立派に博麗の職務をこなしている。
霊耶は霊姫同様、人里で人気があり霊耶を知らない人はいない。
そして霊耶のおかげか最近霊姫は「博麗の巫女」ではなく「霊姫」と人里で呼ばれるようになった。
ちなみに霊耶は霧雨道具店の娘の「霧雨　魔理沙」と仲がよく、人里に行ってはよく魔理沙と遊んでいる。

霊耶は箒を持って境内を掃除していると突然スキマが現れ、そこから金髪の麗人の紫が出てきた。

「霊姫～遊びに来た…って霊耶。久しぶりね。元気にしてた？」
「はい、紫様。母さんなら今朝ごはんを作っています」
「そうなの。ねぇ霊耶、紫様じゃなくて昔みたいに「ゆかりん♪」って呼んでいいのよ？」
「い、いえ。遠慮…します…その…恥ずかしいので／／／」
「……」
「霊耶。ご飯が出来…って紫。来てたんだ。何か用？」
「ねぇ、霊姫」
「何？」
「霊耶私にちょうだい！」
「ダメよ」
「いいでしょう！　霊耶が可愛すぎるんだもん！」
「ダメなものはダメ。この子は私の子なんだから」

そう言い霊姫は霊耶を抱き寄せる。
それを見て紫は羨ましそうに霊姫を見る。

「ね、いいでしょう？　貰うのがダメなら少しの間でいいから貸して！」
「ダメよ！　霊耶は私の子よ！」
「か、母さん！　苦しい…あと恥ずかしいんだけど…」
「え、あ、ごめんね霊耶」

霊姫が苦しそうにしてた霊耶を離したその時、紫が動いた。

「隙あり！」

紫はスキマを出して霊耶を連れて行こうとするが、

「霊耶！　背面取り！」
「はいっ！」

スキマが出る瞬間、霊耶は高速で移動し紫の背に周った。

「博麗拳術壱の技！」
「はいっ！　博麗拳術壱の技、夢拳！」

紫の後ろで構えを取り、背中に強烈の一撃を決める霊耶。
殴られた紫は吹っ飛ばされて目の前の霊姫にぶつかった。
しかし霊姫はがっちりと紫をつかんでいてダメージ無し。

「よし。今日もキレが良くてよかったぞ」
「はい！　ありがとうございます母さん」

霊耶は頭を下げる。
そして霊姫に「先に行ってなさい」と言われ霊耶は居間へ向かった。

「つっ～…霊姫～酷いじゃない。骨が折れるかと思ったわよ～」
「人の子を連れて行こうとして何が酷いんだか…ほらどうせ朝ごはんまだでしょ。紫の分もあるから一緒に食べましょう？」
「霊姫～…」
「ただし霊耶の隣は私だからね！」
「えぇ～いつも隣で食べてるんでしょう？　私でいいでしょう？」
「ダメよ。油断した所を連れて行こうとするからね紫は」
「じゃあそんな事しないから。これでいいでしょう？」
「ダメよ！」
「えぇ～！」

2人は口論しあいながら霊耶が待つ居間へと向かった。
その後…

「はい、霊耶。あ～ん」
「えと、紫様。さすがにそれは…」
「そうよ紫。霊耶が困ってるじゃない」
「母さん…」
「霊耶は私の「あ～ん」じゃないと食べないわよ！」
「えぇ！？」
「だから…はい霊耶。あ～ん」
「そん事無いわよ。霊耶、あ～ん」
「……俺にどうしろっていうんですかー！！」

不運な霊耶の朝だった。

第壱話（後書き）

読み方
霊姫→れいき
霊耶→れいか
沙耶花→さやか
夢拳→むげん
です。
感想など待っています。

第弐話

森の中、１匹の妖怪が今宵の獲物を見つけた。
獲物は女。すらりと引き締まった身体に白い肌。見た目も若く妖怪は涎が溢れた。
最近は全然人間の肉を食べれてなかったのでこの妖怪は非常に飢えていた。
そんな中現れた１人の獲物。しかも女。
女の肉は男の肉と違って柔らかく、それでいて美味。しかもそのおいしさは若ければ若い程、濃厚で癖になる。
妖怪は息を潜めて女を見る。女は気付いていない。
妖怪は爪を研ぎながらその時を待った。女を一瞬で仕留めるその時を…
１歩１歩と女は歩く。妖怪は自分の欲を抑えながら時を待つ。
そして来た。その時…女の首を一瞬で狩る時が。
妖怪は駆ける。獲物へ。女へ。
自分の爪が女の首を突き刺し、その女の肉を喰らう。
そんな自分の姿が容易に思いついた。
しかし、そうはならなかった。
爪が女の首を貫く瞬間、女の姿が消えた。
妖怪は突然の事に驚き、辺りを見回すが女は見当たらない。
さらに見回すと約１０メートル先にさっきの女がいた。後ろを向けている。
妖怪は何故、女が消えたのか深く考えなかった。それより、ここで女を再び仕留める事に頭がいっぱいだった。
妖怪は女へと再び駆けた。そして爪で女の首へ突きたてようしたが、
「詰めが甘い。お前では何千年経っても私を殺す事は出来ん」

女は言う。
すると妖怪の動きも止まった。そしてゆっくりと倒れた。
妖怪は動かない。ただ妖怪の血が地面を赤く染めていった。
女は妖怪だったソレを見ると1つ溜息をついた。

妖怪は獲物の選択を間違えていた。獲物の女は普通の女ではなかった。
妖怪を狩り、妖怪に恐れられる存在。
女の名は博麗　霊姫。今代の博麗の巫女で歴代最強の破壊力を持つ神社の巫女さん兼子持ちの母親。
「楽園の素敵な撲殺巫女」とは彼女の事を指す…

霊姫は森の中で1人溜息をついた。
そして霊姫は巫女服に妖怪の返り血がついてないかを確認すると踵を返して人里の方へ向かった。
現在霊姫は人里の守護者、上白沢　慧音から妖怪退治の依頼を受けている。
最近、妖怪の動きが活発に活動している所に警戒し、慧音が霊姫に頼んだのが事の始まりである。
そして今、霊姫は依頼として妖怪退治をしている。
ちなみに慧音も人里の前で妖怪退治をしている。
慧音曰く、「お前が仕留め逃した奴は私が仕留める」との事。
信用されているのやら、信用されていないのやら。
最後に霊耶も妖怪退治に参加しているが霊耶は人里の中に入ってきた奴のみ撃退という事になっている。
そして何かがあったらすぐに慧音か自分が駆けつけられるよう言い

聞かせていた。
こうやって3人で妖怪退治をしているのだがどうにも霊姫は腑に落ちなかった。
『スムーズ過ぎる』
そのワードが霊姫の頭から離れなかった。
今までも何度も妖怪退治をしてきた霊姫。
しかしこんなに簡単に妖怪退治が出来た事は今まで無かった。
霊姫は今の状況を考えた。
今、霊姫は妖怪を狩る為、人里からかなり離れている。
妖怪も最初は人里から離れるほど多く襲ってきたが今は少ない。それどころか今では1匹程度しか襲って来ない。
最初の時は手応えがあったが今では無い。さっきみたいに襲ってくる妖怪もいたが、後のほとんどは見かけるとすぐ逃げていた。
まるで自分を人里から離すように仕向けるように逃げて…
人里から離すように？

「っ！？」

霊姫は人里の方を向くと一気に地を駆けて行った。
ここになって霊姫は気付いた。自分が人里から遠ざけられていた事に。
今、人里の守りは慧音1人。確かに慧音も強い。だが相手の数にもよる。もし相手が多くて一気に襲ってきたら…それで1匹でも人里に入れてしまったら…
霊姫の顔から血の気が引く。
霊姫は首を横に振ってさらにスピードを上げる。
最悪の結果にならないよう祈りながら…

人里の前で人里の守護者、上白沢　慧音が１人で１０匹以上の妖怪と対峙していた。
霊姫の予想通り、慧音が１人になった時、大量の妖怪が人里へ押し寄せていた。
くそっ、と慧音は悪態を吐いて襲ってくる妖怪を地に伏せた。
１対１０という絶望的な大差だが慧音は１人で対応していた。

「くそっ…やってくれたな妖怪共が…」

慧音は苦悶の顔を浮かべ空を見る。
空は暗い。そして…月は欠けている。
慧音…に限らず妖怪という者は月に影響を受けるものである。
月が満月ならその月の魔力を最大限に受けることが出来る。しかし今は月が欠けている。なので全力の力を出せない。相手の妖怪も同じ事だが、こうも数が多いとさすがに慧音でもキツイ。

「しまっ！？」

３匹の妖怪が襲って来た時、隙を狙って１匹の妖怪が人里の中へ入り込んでしまった。
襲ってきた３匹の妖怪を一瞬で倒し、人里に入った妖怪を追おうとするが目の前にいる妖怪達の所為で人里へ向かえない。
１匹入れた事に歓喜を上げる妖怪達。自分も自分もと妖怪達が一気に人里へ押し寄せてくる。
慧音は舌打ちをして襲ってくる妖怪達の対応に戻る。
慧音は妖怪達と対峙しながら後の事は人里にいる霊耶に頼るしかなかった。

霊耶は人里の稗田家の中にいた。
人里の住人は稗田家か慧音の学校に移動していた。
そしてこの2つの家には霊姫特性の結界が張ってある。
低級妖怪なら触れた瞬間にあの世行きだが、もし破ってくるような奴がいたなら…その時は霊耶が対応する事になっていた。
そして霊耶は稗田家のある部屋で目を閉じてじっと座っていた。
廊下からドタドタという音が聞こえると勢いよく扉が開かれた。
霊耶は目を開き、来た人物を見る。
その顔には見覚えがあった。
霧雨道具店店主の女房、霧雨　沙耶花。
いつもの天真爛漫な笑顔は消え失せ、疲れきったような顔をしていた。

「……ちゃんが……い」
「えっ？」
「魔理沙ちゃんが…いない」

それを聞いた霊耶は驚きを隠せなかった。

事情を聞いた霊耶は稗田家を出て魔理沙を探しに行っていた。
人里の外では母の霊姫と人里の守護者の慧音が戦っているとはいえ、危険がないわけではない。
霊耶は血眼になって魔理沙を探した。
その時、

「きゃあぁぁああ！！」
「っ！？」
霊耶は悲鳴の聞こえた方へ駆けて行った。
声は霧雨道具店の近くから。
霊耶は嫌な予感が隠せなかった。

霧雨道具店に着くと見知った顔を見つけた。
長い金髪に白いドレスを着た少女。霧雨　魔理沙。
そしてもう１つ。出来れば見たくも会いたくもなかった存在。
２足で立ち、体中を毛で覆われていて、するどい爪と牙を持つ…妖怪。
妖怪…人狼が魔理沙を今まさに襲おうとしていた。
始めて見た妖怪に恐怖を感じながらも霊耶は前に出て人狼に攻撃を仕掛けた。
相手は気付いていない。霊耶は人狼に向け一気に駆け、その首に向かって蹴り込んだ。
よし、と霊耶は小さく声を上げた。霊耶の蹴りは見事、人狼の首に叩き込まれていた。
人狼を倒した。魔理沙を守った。そう思った。
しかし、
「邪魔ダ！」
蹴りの威力が思ったより無かったのか、そう言い人狼は腕を振るって霊耶を吹っ飛ばした。

「霊耶っ！？」

魔理沙の声が聞こえ意識を取り戻す霊耶。
今、自分が倒れたら魔理沙が殺される。そう自分に言い聞かせて立ち上がる。
だが、足は言う事を利かない。

「何ダ餓鬼？　足ガ震エテルゼ？」
「っ！」

霊耶の足の震えは止まらなかった。
魔理沙を助けたという気持ちと同時に、自分への死の恐怖を霊耶は感じていた。

「邪魔ダ。其処ヲ退ケ。ソシタラオ前ノ命ダケハ助ケテヤロウ」

人狼からの提案。
しかし後ろで魔理沙を感じる。それだけで霊耶の答えは決まっていた。

「嫌…だ……絶対……退かない！」

声を振り絞って人狼に言う。
人狼はソレを聞くと、

「ソウカ……ジャア…」

爪を尖らせ、腕を振り上げた。

「死ネ」

無情にも爪が、腕が、振り下ろされた。
霊耶は避けない。避けたら魔理沙に当たる。
霊耶は構えを取り、攻撃に備えた。

「…ダメっ！」
「えっ！？」
「ナッ！？」

しかし、予想外の事で呆気を取られた。
その後、横から聞こえる嫌な音。
爪が人を引き裂く音。
恐る恐る霊耶は横を向く。
思いつきたくもない光景が頭に浮かぶ。
その光景を何度も何度も否定するが…消えない。消せない。

「あぁ…あぁ…」

見えたのは倒れている少女。

「あ、あぁ…あぁあ…」

少女はぐったりしている。顔色も悪い。

「あァ…あァああ…あァあああ…」

少女のお腹の部分を中心にドレスが真っ赤に染まっていた。

「あァァァあああああァァあああああああァァあああああァァあああァ！！！」

「クソッ！　馬鹿ナ事シヤガッテ。女ハ傷ツケズ後デユックリ喰ウツモリダッタノニナ！」

人狼は悪態を吐いて少女に向けて言葉を放った。

「マアイイ。ソレヨリ今ハコノ餓鬼ダ。サッキカラウゼェ」

人狼は霊耶の方を向き言う。

「餓鬼、サッサト消エロ。目障リダ」

「あァァ…アァぁ…」

「クソガ…モウイイ…死ネ！」

人狼は腕を振り上げ、ソレを振り下ろす。

「ッ！？」

しかし人狼の爪は霊耶に刺さらなかった。

寸前で霊耶が避けていた。

「運良ク避ケヤガッテ…サッサト死ネ！」

今度は逆の腕を振り下ろす。だが避けられる。

「クソガ！　死ネ！」

振り下ろしがダメならと、今度は鋭い爪で突いてきた。

しかし霊耶は身体を逸らして避ける。そして肘と膝を使って人狼の爪を叩き折った。

「ッ！？」

だが霊耶の動きは止まらない。爪を折って怯んでいる妖怪の顔面に向け正拳突きを放つ。
人狼はソレをモロに喰らい苦悶の顔を浮かべる。
人狼は霊耶を吹っ飛ばそうと腕を振るうが…腕は空振る。
すると背中から鈍器を叩きつけられた感覚を感じ吹っ飛ぶ。
霊耶は後ろにいた。そして鈍器のような感覚は霊耶の蹴りだった。
どういう事かさっきより異常に威力が強かった。
人狼に焦りが生まれる。
人狼は背を向けて霊耶から逃げようとした。しかし霊耶はソレを許さない。
逃げようと背を向けた人狼だが目の前には霊耶がいた。
そして霊耶は人狼の足に向けて蹴りをかます。
人狼の足から鈍い音が響いた。
あまりの痛さに声にならない絶叫を上げる人狼。
霊耶は足が折れて立てなくなった人狼に1歩1歩近づいていく。

「ヒッ！？　タ、頼ム。見逃シテクレ！」

命乞い。
生命の危機を感じた人狼は霊耶に命乞いをする。

「ホ、本当ハ乗リ気ジャ無カッタンダ！　コンナ事シテモ意味ガ無イ事グライ分カッテタンダ。デ、デモ無理ヤリ連レテ来ラレタンダ！　シ、信ジテクレ！」

人狼は命乞いをする。しかし霊耶は歩みを止めない。1歩1歩、人狼の死への道はゆっくりと近づいてくる。

「タ、頼ム。…ソ、ソウダ！　オ、俺ガ他ノ奴等ニ、モウ人里ヲ、人間ヲ襲ウナト言イツケル。ド、ドウダ？　良イ案ダロ？　ダカラ俺ヲ見逃シテクレ！」

だが霊耶は止まらない。1歩1歩近づいてくる。

「ヒッ！？　本当ダ！　本当ニ人間ハ襲ワナイ。…コノ通リダ！」

人狼は頭を下げる。

すると霊耶は止まった。

そして今まで閉じていた口が開いた。

「あはハ……アハハハ……アハハハハハハハハハハハ！！！」

顔を上げる。さっきまで黒かった瞳は赤く…血のように深い赤色をしていた。

霊耶は右手で顔を覆い、上を向いて大笑いする。

突然の行為に人狼は妖怪だという事を忘れ本気で霊耶に恐怖を抱いた。

殺される。

その文字が人狼の頭によぎった。

殺らなきゃ…殺られる！

人狼はまだ折れてない方の爪で襲い掛かる。

霊耶の体がブレる。爪が避けられる。

霊耶は人狼の胸元にいる。

人狼は爪の折れた方の腕で叩き潰すように殴り掛かる。

しかし、その前に霊耶が動いた。

「博麗拳術奥義ィ」

「ヒッ！？」

「内臓破壊！」

霊耶の腕が人狼に突き刺さる。霊耶は突き刺さった腕を引き抜くと血を払うように腕を振るった。

人狼の動きが止まる。

そして…ゆっくり倒れていった。

人狼の返り血が霊耶に掛かる。だが霊耶はソレを否定せず、腕を開き歓迎するように浴びる。そして…嗤う。

「アハハハハ……アハハハハハハ……アハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

静かな人里に狂った笑い声だけが響いた。

霊姫はあの後、慧音と合流し残った妖怪の撃退。その後、慧音を残し人里へ一足先に向かった。妖怪との戦闘中、人里から声を聞いて霊姫はずっと心配していた。そして人里のある部分、霧雨道具店の近くに行くと霊姫は行きを呑んだ。

目に入ったのは３つ。

１つは倒れている金髪の少女。息はしているが、傷が深いのか息は荒い。

次に倒れた妖怪。内臓の部分がぐちゃぐちゃになっていてすでに息を引き取っている。

そして…嗤っている少年。こんな状況でありながら、まるで狂ったように嗤っていた。

霊姫は金髪の小女…魔理沙に近づく。霊姫は自分の巫女服の１部を

破ると傷に巻きつけて止血を行う。そして同時に少年…霊耶にも声を掛ける。

「霊耶何をしている！　早く魔理沙ちゃんの応急処置を手伝え！」

声を荒げて霊耶に叫ぶ。

しかし、

「霊耶？」

さっきまで狂ったように嗤っていた霊耶だが今は静かだった。不思議に思った霊姫は霊耶を見た。

…霊耶は自分の体を抱いて震えていた。

「俺は……俺は……」

霊耶から声が洩れた。

俯き震え、ただただ声を漏らしていた。

霊姫に遅れて慧音もやって来た。

慧音は現状を見て一瞬驚いたが、頭を横に振り、霊姫に近づく。

「霊姫！　私は今から医者を呼んでくる。それまで魔理沙の応急処置を頼む！」

「えぇ、分かったわ。霊耶！　アナタも慧音と…」

そう言いかけて慧音に制される。霊姫は文句を言おうとするが慧音は無言で頭を横に振る。

言いかけた言葉を飲み込み、再び霊耶を見る。霊耶は倒れていた。

「緊張が取れたのか疲れで倒れたのか分からないが…今は休ませてやろう。…さぁ、ここからは私達の仕事だ」
「え、えぇ…」

慧音は医者を連れて来る為、人里を出た。そして竹林へと向かって行った。
霊姫は応急処置をしながらさっきの霊耶の姿を思い返していた。
大声で嗤い、狂ったように声を上げる姿…そして……赤い瞳。
霊姫はその姿を頭に残しながら魔理沙の応急処置に励んだ。

第弐話（後書き）

博麗流→博麗拳術
に変更しました。
ではまた。

第参話（前書き）

グダグダ注意報発令

第参話

霊耶が目を覚ますと、そこには知らない天井があった。
そして目を覚ますと同時に霊耶の頭に2つの姿が過ぎった。
傷ついた魔理沙の姿。襲い掛かる人狼の姿。
はっ、とし身体を起こそうとするが、身体から酷い鈍痛を感じ再び布団へ倒れこむ。
必死で身体を動かそうとする霊耶だが、身体は言う事をきかない。
それでも動かそうとするが、外から声が聞こえ動きを止める。
耳を済ませてみる。すると声がはっきり聞こえてきた。弱弱しいが聞き覚えのある声と、可愛らしい女の子の声。
沙耶花と魔理沙の声だ。

『よかった…ホントによかった…』
『お母さん…ごめんなさい』

2人の声が聞こえ、ようやく霊耶は身体の力を抜く。
そして安心したのか急に眠気が襲ってきた。
霊耶はそれに抵抗せず、ゆっくり瞳を閉じ、泥のように眠った……

額にひんやりした感触を感じて霊耶は再び目を覚ました。
目の前には柔らかそうな人の手。それを少しずつ辿って行くと、そこには1人の少女がいた。
その少女は幻想郷では珍しい服装だった。ブレザーにワイシャツ、そしてスカート。さながら女子高生を連想させるような少女だった。

しかし、霊耶の目はそこには止まらなかった。
制服を連想させるような服装より異常なモノを見つけてしまったからだ。
それは……垂れたウサ耳。

「あの…私の顔に何か？」

あまりにも少女のウサ耳を見入っていた為、少女は気になったのか霊耶に聞く。
霊耶は慌てて目を逸らして「何でもないです」と小さく呟いた。
その後は気まずくなったのか、お互いに一言も会話を交わさず、霊耶の看病が終わるとそのまま少女は逃げるように部屋を出た。
霊耶はその姿を見た後、1人小さくため息を吐いた。

あれから数時間が経ち、ようやく立ち直った霊耶だが、やる事がなくボーっと外を眺めていたら廊下からドタドタと騒がしい音が聞こえた。
誰かが誰かを呼ぶ声。そして開かれる部屋の襖。
現れたのは1人の少女。
長い黒髪に綺麗な和服。だがそれよりも際立つその美貌。
霊耶は静かに息を飲む。

「ん、アンタ誰？」

少女からそう問われる。
だが霊耶は少女の可愛らしさに目を奪われていて言葉は耳に入らな

かった。
無視された事に腹が立ったのか、少女は霊耶に顔を近づけて再び言い放つ。

「だ～か～ら～、アンタ誰？」

ようやく言葉が耳に入ったのか、はっとし霊耶は慌てて「博麗　霊耶です」と答えた。
少女はふ～んと言うと無い胸（殴……胸を張って霊耶に言う。

「私は蓬莱山　輝夜。ここ、永遠亭の主よ」

そう霊耶に告げると輝夜は部屋に入り部屋を見回す。
そしてあるモノを見つけると輝夜は部屋から顔を出し、廊下にいる誰かに声を掛ける。

「見つけたわ！　ここよ！」

そして廊下にいる誰かに手を振る。
輝夜はその後、霊耶がいるにも構わず部屋に置いてあった黒いモノのボタンを押すとその前に座り始めた。
黒いモノのボタンが押された時、耳にキーンっと耳鳴りが耳に入り、霊耶は苦悶の顔を浮かべる。
だがその音もだんだんと弱くなっていき、数秒すると耳鳴りを感じなくなった。
霊耶は不思議そうな目で黒いモノを見る。それに気付いた輝夜は自慢気に霊耶に答える。

「これはテレビと言ってね『モノの動きや情報を読み取り、それを映像として映す程度の能力』を持った機会よ」

淡々と語る輝夜だが、霊耶はその半分以上も理解出来てなく、首を横に傾げて難しい顔をしていた。
そんな霊耶に気付いたのか、輝夜はさらに続けて言う。

「簡単に言えば絵を写す箱よ」

それを聞き、ようやく理解し顔を明るくし頷く。
少し輝夜と談笑していると廊下からもう1人の少女が此処に来た。
輝夜とは正反対の白髪で、輝夜と違い質素な服を着ていた。

「輝夜…勝手に先に行くな。私はゲームを持ってきてるんだぞ」

少女は暢気に座っている輝夜に言う。
確かに少女はそのゲームと言うモノを持っていた。
どうやら輝夜は少女にゲームを持たせて自分は1人で此処に来たようだ。
少女が腰を下ろし、ゲームを床に置いた所で一息吐く。
そして目線が霊耶の方へ向かれる。
少女は瞳を2、3度パチクリさせると輝夜の方を向き疑問を口にする。

「なぁ輝夜…此処って病室じゃないのか？」

確かに今ここは霊耶が病人として使ってる病室だ。
だが輝夜は少女の方を向くと質問を流すように答える。

「別にいいのよ。霊耶も暇してる感じだし…別にいいわよね？」

いきなり呼び捨て、しかも名前で呼ばれた事に少し焦ったが、霊耶

は別に断る理由もなかったので頭を上下に動かす。実際に暇だったので暇を潰せるなら自分にとっても悪くないと霊耶は考えていた。

「ほらいいでしょう？　私も手伝うから早くゲームしましょ！」

そう輝夜に言われ、少女は小さくため息を吐いて一緒にゲームの準備を始めた。

もう1人の少女は藤原　妹紅と言うそうだ。

先程ゲームの準備を終え、輝夜がゲームの最後の準備をしている時に軽く自己紹介をした時に知った。

輝夜との関係は古い頃からの友人……だそうだ。

幼馴染みたいなものだろうと霊耶は考えた。

そして現在、輝夜と妹紅は「同じ色の生物を4体以上近づけさせ、それを消滅させ合う」というゲームをやっている。

2人共慣れているのか淡々とゲームをやっていた。

片方の画面に謎の生物が溜まったと思ったら、謎の生物をある場所に置くとその生物がどんどん消えて行き相手を邪魔したり、その状況からすぐもとの数まで生物を減らしたりと、よく分からないがとてもすごかったと霊耶は思った。

お互いに生物を消し合ったり、相手の邪魔をしたりをしている間、その均衡が崩れて徐々に攻められていき、結果、輝夜が勝利した。

現在成績は輝夜が１２勝。妹紅は１０勝の状況だ。

だが、飽きてきたのか輝夜は別のゲームを取り出し、それを妹紅に見せる。

妹紅は何も言わず頷く。輝夜はそれを見るとゲームを黒い機械に入

れる。
少しすると熱くなるような歌とともに黒いモノに赤い髪の少年が動き出した。
霊耶はどんなゲームか妹紅に聞いてみると「生きる意味を知るＲＰＧ」と言われた。
ＲＰＧという聞き慣れない単語に頭を悩まされたが、とりあえず輝夜がゲームをやっているので観戦する霊耶。
どうやらこの赤い髪の少年が主人公らしく、彼を主点に物語が進められていた。
戦闘では必殺技みたいなモノもあり、霊耶は年頃の子どもの様に少し興奮した。
ある程度ゲームを進めていると、襖からさっき霊耶を看病していたウサ耳の少女が輝夜の元に来た。
少女は輝夜に近寄り耳打ちすると輝夜は立ち上がって「ごめん。少し用が出来た」とだけ告げるとゲームを中断して部屋を後にした。
その時、霊耶はウサ耳少女と目が合ったが、すぐ目を逸らされ輝夜の後を追うように部屋を後にした。
それを見て再び気が重くなる霊耶。
「何かやったっけ」と呟き、深く思案する霊耶。
隣ではその姿を見て失笑している妹紅がいた。
霊耶はそれを見てどうして笑っているのか問いただす。
妹紅は「コロコロと表情が変わって面白い」と答えた。
それを聞き、げんなりする霊耶。彼からしたら真剣だったのだが妹紅からしたら、その姿は面白かったようだ。
妹紅はさすが悪く思ったのか霊耶に謝ると同時に「何か困っているなら話しぐらいなら聞いてやる」と言い霊耶を宥める。
霊耶はそれを聞き少し考えて、
「妹紅さんは…自分が生きる意味って何だか分かりますか？」

と口にする。
意地悪が４割と本心が６割。
そんな気持ちでこの内容を妹紅に聞いてみた。
妹紅は少し懐かしそうな表情をすると優しく話す。

「私の生きる意味…あるとしたら……ある人を一生守る事…かな」
「守る…」
「あぁ…私は昔、ある奴を殺したい程に憎んでいたんだ。私の大好きな親に恥をかかせ…私から親を奪った…そんな奴だ。
だから私はソイツを恨んだ、憎んだ、呪った。
…そしてある日、私は決心した。アイツをこの手で殺そう…と。
その為、私は必死になった。
アイツを守っている兵士達の行動時間を調べて、どうアイツの親にバレずに殺すか、武器は何にするかと……あの時の私は『アイツを殺す事』それだけが生きる意味だった」

霊耶はそこまで聞き息を呑む。
妹紅は一息吐くと再び語り始める。

「…私は兵士の目を盗み、ずっと調べ続けた。兵士、アイツの親の行動を入念に、みっちり調べた。だけど…それも意味が無くなった。アイツが…ある場所に帰る。そんな情報が私の耳に入ったんだ。だから私は焦った。今まで考えてきた事が全部水の泡になったからな……。
私はすぐに計画を実行した。だけど運が悪かった。計画を実行した日…その日がアイツがある場所に帰る日だったんだ。
私は急いだ。アイツがどこかに行く前に、この手でアイツを殺す。
それだけが私の頭を埋め尽くしていた。
そして…見つけた。アイツを…隣には親、その隣には帝。そして前には空を飛んでいる謎の連中。

だけど私には関係なかった。アイツを殺す。それしかなかった。あとの事なんか全然考えていなかった。
私はアイツに駆け寄った…手にした包丁を強く握り、アイツを殺そうとした。でもその前に帝達の攻撃が私に襲ってきた。
私はアイツを殺す事を忘れ、本気で死の覚悟をした…でも私は死ななかった。それどころか無傷だった。何故だか分かるか？」

妹紅はキリ良く話を止めると霊耶に質問する。
霊耶は首を傾げ考える…が全然思いつかず首を横に振る。

「そうだよな…話しを戻す。
…それでも私は死ななかった。それは何故か？　それは……アイツが身体を張って守ってくれたからだったんだ」

霊耶はその言葉に驚きが隠せなかった。
恨んでいる人物に命を守られた…そんな状況が頭に浮かぶ事が出来なかった。

「…アイツは私を守ってくれた。襲い掛かる矢を1本残らずその身体で受け止めていた。
これには私も驚いた。もちろん帝達、兵士達も驚いていた。
そしてアイツは私の所に寄ると私を抱き寄せて、

「大丈夫？　怪我はない？」」

そう私に言ったんだ。
私は焦ったよ。何せ殺そうとした奴に命を守られたからな…。
だから逆に言ったんだ「お前は大丈夫なのか？」って。我ながら、今を思えば何で殺そうとした奴にそんな事聞いたんだろうな」

そう昔の事を思い出しながら言い、妹紅はゆっくり目を閉じる。

「結果、アイツは無事…だったらしい。とく分からなかったがケロッとしていたからだろう。
アイツは空に飛んでいる奴等に「大丈夫だから気にしなくていい」というと私の頭に手を乗せて撫でたんだ。
その手は柔らかくて…そして……とても暖かった。
そして思ったんだ…何故私は…復讐なんてしようと思ったんだって。
アイツの本性を一皮向けばただのお人好し…復讐なんて考えた私が馬鹿みたいだよ」

そう言い妹紅は少し笑った。

「その後…アイツは帰って行ったよ。でも帰る前に「この子は悪くない。だから罪に咎めないで欲しい」って言ったんだ。
最後の最後までホント、お人好しだったよ…アイツは」

そう言う妹紅は瞳から涙を流していた。

「まぁ、そんな事だ。そして私はまたアイツに会う為に、そして…アイツを守る為に生きていった……こんな話しだ」

妹紅は涙を流しながら笑う。その笑顔はとても…美しかった。

「ねぇ、妹紅さん…出会えました？　その…お人好しさんに」
「あぁ、それは…」

そう言いかけたところで襖が開かれ、そこから輝夜が部屋に来た。

「ただいま～…あ！　妹紅！　どうしたの！？　何で泣いてるの！

？　…霊耶！　何泣かしてるの！」
「え！？　俺は何も…いや、何もして無いわけじゃないけど…」
「やっぱり貴方なのね…覚悟は出来てるのかしら？」
「か、覚悟！？　え！？　俺…死ぬの？」
「妹紅を泣かした事…その命で償いなさい！」
「り、理不尽だぁぁあああ！」

動かない身体に鞭を打って無理やり動かす霊耶にそれを恐ろしい形相で追う輝夜。そしてさっきと変わって…優しく笑う妹紅。
そして……

「あぁ、会えてるよ…今、元気に…幸せそうに過ごしてるよ」

そう言い……輝夜に笑顔を向けた。

霊耶の入院生活は傷が完治しても数日続いた。
それは永琳が中々帰してくれなかったからだ。永琳は傷以外の事を調べているようだがそれに霊耶は気付いていない。
そしてある日…

「…もういいわ。明日で退院よ」

やっとその言葉を受けた。
霊耶はそれを聞くと「やっとか…」と聞こえない程度に呟く。
霊耶としたら入院中の生活も悪くは無かった。むしろよかった方だ。
輝夜と遊んだり、妹紅に色々相談に乗ってもらったり、輝夜と遊ん

だり、魔理沙と遊んだり、輝夜と遊んだり……入院生活の６割は輝夜と遊んでいると思い首を横に振る。
日は進み、退院の日。永遠亭のみんなが霊耶を出迎えていた。
「ありがとうございました。ここでの生活はホント充実した毎日でした」
心の中で「鍛錬は出来なかったけど…」と呟く。まぁ、仕方ない事だ。
「えぇ私も悪かったわ…ホントなら早く退院できたのに」
「いえ、別にいいですよ。今では此処の生活が名残惜しいくらいですし」
「じゃあもう少しくらい此処にいなさいよ」
輝夜がそう霊耶に言う。
入院生活の間に霊耶の事を気に入ったのでもう少し引きとめようとする輝夜。だがそれを鈴仙が止める。
鈴仙とは最初の方は気まずかったが、今では普通に話せる程度には仲良くなっていた。
「「ダメですよ姫様。霊耶さんにも仕事とかがあるんですから」
仕事…境内を掃除したり、祭事をするくらいしか仕事はないのだが…後、依頼。
「むぅ～…」
輝夜は頬を膨らませて怒る。それを見て少し笑ってしまう。やはりここでの生活は霊耶にとってとても充実…

「お兄さん」
「ん…何てゐ？」
「いい写真でしょ」

そこに写っているのは入院中に起こった主に…ハプニング？　的な写真だった。主に鈴仙と霊耶の写真が多い。穴に落とされたり、顔にラクガキされて笑われたり…
ホントに充実してたっけ…と思い、てゐから写真を奪う。
てゐは「ちっ」と舌打ちをした。どうやらあの写真で何かするつもりだったらしい。取って正解だった。

「じゃあ行くか」
「はい」

最後に妹紅にそう言われ永遠亭を後にした。永遠亭のみんなは霊耶の姿が見えなくなるまで手を振っていた。
そして竹林の中、霊耶と妹紅は2人、人里へ向かっていた。

「妹紅さんもありがとうございます。色々相談に乗ってくれたりして…」
「別にいいよ。…それより……決心は着いたか？」

妹紅はそう霊耶に告げる。霊耶は1枚の手紙取り出し答える。

「はい。決心は……着きました」
「そうか…」

最後に妹紅は小さく笑って歩を進めた。
霊耶はそれに何も言わず着いて行った。

人里で妹紅と別れ、霊耶は走って博麗神社へと向かった。
手に持つ手紙を強く持ちながら…

博麗神社に着いた霊耶は母、霊姫がいるか確かめた。
……いない。これは好都合だと思い、手紙をテーブルの上に置いて博麗神社を後にする。
そして出かける前に神社の方を向き

「母さんごめんなさい。そして……行ってきます！」

そう言い、霊耶は博麗神社から姿を消した。

第参話（後書き）

霊耶は森の中で声を上げた。

「紫様！　どこですか！」

そう声を上げていると目の前にスキマが現れ、そこから金髪の麗人…妖怪の賢者、八雲　紫が現れた。

「どうしたの霊耶？　私に何か用？」

笑顔で訊ねる紫。だが霊耶の顔を真剣そのものだった。

「紫様…俺を強くしてください！」

「えっ」

突然の事に紫は珍しく驚いた。

「俺、強くなりたいんです。そして…この手でみんなを守れるような、そんな人間になりたいんです！」

それを聞くと紫は扇子を取り出し口元へ持っていく。

「…えぇ、確かに霊耶を強くする事は出来るわ。でも…貴方に覚悟はあるかしら？　妖怪を殺す覚悟。そして…人間を殺す覚悟が！」

霊耶は下を向く。だがすぐに顔を上げて紫に答える。

「覚悟は…出来てます！」

その顔はまさにすべてを覚悟した…そんな顔だった。

「……ふふ、懐かしいわ。霊姫もそんな事言ってたわね。やっぱり親子なのね貴方達は」

「母さんも…」

「えぇ、私に一語一句、完璧に同じ事を言ってたわ」

そう言い一瞬懐かしそうな顔をしたがそれをすぐ引き締める。

「私の修行は厳しいわよ？　着いてこれるかしら？」

「上等です。何でもやりますよ俺は…」

「じゃあ…行きましょう」

紫は霊耶の前にスキマを開ける。

霊耶は何も言わずその中へと入って行った。

その背中は…もう子どものモノではなくなっていた。

そしてスキマは閉じ、誰もいなくなった……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1440w/

東方拳夢録

2011年10月20日09時18分発行